

命の大切さ — その思いを共有できる学校飼育活動

石島 敦子

本校は複式学級二つを有する全4学級の小規模校です。本校がある栃木県佐野市の全小学校では平成11年度、栃木県教育委員会から「地域の獣医師との連携に関する開かれた学校づくりの推進校」の指定を受けました。その3年間の取組が終了した後も、子どもたちのためにとの希望が多く、現在も続いています。

資料にもあります生活科の学習指導案は、佐野市の小学校で定着している物です。子どもたちが、温かい雰囲気の中で自由に、伸び伸びと質問したり、ウサギと触れ合ったりできるように、2人～5人のグループに一人の割合で獣医師の先生方が来てくださいます。そして本当にいいねいに膝をつき合わせて子どもたちと向かい合ってくださいます。その経験で子どもたちの心が変化していったと感じる出来事はたくさんあります。中でも命について。6年前、当時、年を取ったウサギのミルクが死んでしまったとき、みんなが悲しむ中で、「でもさ、これで、また新しいウサギが飼えるね。」という言葉をした子がいました。でも飼育活動を続けて3年後、やはり年を取ってウサギのチャッピーが死んでしまったときその子は、チャッピーの死を看取ってくださった獣医師の先生に、「命は大切なものだから、一つしかないから。私は、これからもずっと命を大切にしていきたいです。」というお礼の手紙を送りました。もちろんこの子だけでないことはご想像のとおりです。

私は本年度は、4年生と5年生の担任ですが、1年生と2年生が合同で行っている生活科の授業も担当しています。その生活科に関して、今回は特に学校の生き物とのかかわりについてふれたいと思います。1学期は上学年の飼育活動を見たり、1年生は2年生に教えてもらって生き物とふれあったりする活動が中心で、9月10月は1年生と2年生が飼育当番です。私はそのときの子どもたちのつぶやきを授業に生かすように心がけました。子どもたちが口々に言ったのはハッピーやキャラメルたちが快適に過ごせる寝床が作ってあげたいということで、資料にあるような活動を行いました。「うーんと寒くなる前に作ってあげたいね。」「喜ぶかな。」そんな会話を交わしながら、笑顔いっぱい、一人5回ずつノコギリをひき、金槌を打ち、回数を重ねるごとに11回ずつ、20回



ずつと上手になっていく姿、そうやって、自分たちが作った寝床に、初めてハッピーが足を踏み入れた瞬間、子どもたちの目が輝き、歓喜の声が校庭中に上がりました。お陰様で、この冬は、風の強い日も、雪の日も、二つ作ったその寝床の中にウサギ、チャボ、ウコッケイ、インコまでが温かそうに入っている姿と、それ満足そうに見つめる子どもたちの笑顔を見ることができました。

子どもたちは、入学して初めはウサギ、そして学年が上がるに従って、チャボたちを手や肩や頭に乗せることができるようになります。信頼関係ができると生き物は自分から近寄ってきますし、抱かれ上手にもなるようです。

日々の生き物との生活が学習にも思いがけない影響を与えています。かわいがっていたウサギの死を経験した1年生が国語で『ずっとずっと大好きだよ』という単元を勉強したときのことです。それは犬のエルフが年を取って死んでしまうお話で、読んであげたとき、子どもたちは涙を流しました。そして私に「先生、ぼく、何回読んでもエルフが死んじゃう場面になると涙が出ちゃうんだ。」と言いました。みんながうなずいていました。家族の愛情に見守られて死を迎えたエルフと自分たちのウサギの死が重なるのだそうです。あのとき、子どもたちの気持ちに共感し、一緒に悲しんでくださった獣医師の先生との思い出も大きいものでした。今でも「あのときは悲しかったね。うれしかったね。」と生き物の死や、生き物が親しんでくれたことを話しかけると共感し合える仲間がいる、そんな喜びを子どもたちと共に私自身

も感じています。

そのことは道徳の「生命尊重」の授業でも生かせることを感じています。今まで私が行った、ほんの一例ですが資料に載せてみましたので参考にご覧ください。「命」に対する同じ思い出があるからこそ共感できた子どもたち、自分の思い出も共感して受け止めてもらえる信頼感、それらは子どもたちの心を開き、安心して言葉を発することができる場となっていると感じます。「頭」だけの理解ではない「心と体」での理解、これが日々の飼育活動が生きる場となっていると感じます。

そのほかにも子どもたちの活動の様子や、毎日のつぶやき、話すことや友達とのかかわりが苦手な子がウサギを通して輪を広げていったことなど、お話ししたいことは本当にたくさんあります。

最後に、子どもたちの心の変化について聞いてください。本校の子どもたちは全員ウサギとかチャボではなく、1羽1羽名前呼びます。その生き物たちに対して、かわいい、仲良くなりた、大好き、といった気持ちをもっています。大好きなウサギの死を経験して命を意識し、生き物も大切な友達、仲間だと言います。そういう子どもたちに鳥インフルエンザが流行した時期、飼育活動を休ませたときがありました。子どもたちはふしぎがりました。複雑な表情の子どもたちを気にしながらも2週間が過ぎた頃、校長先生に声をかけられました。「子どもたちに飼育活動をさせましょう。このままじゃ命の教育はできませんよ。必要な物があったら伝えてください。全部用意します。」その言葉で、目の前に扉が開いて、背中をぐいっと押された思いでした。

中川先生のご講話で、この時期の飼育活動で注意すべきことは、子どもたちが外の危険(ウイルス)を飼育舎内に持ち込まないことだと分かり、対策を講じての飼育活動が再開されました。でも、「先生、ぼくは鳥インフルエンザなんて気にしてない。白衣を着て汚れるのを防ごうなんて思っていない。白衣なしでも、ハッピーたちを今まで通り抱っこできる。それに、靴が汚れたっていいから長靴なんていらない。」と、言った子がいたのです。私は、話をうまく伝えられなかったことを反省しました。そしてあなたの靴や体が汚れないようにではなく、あなたが知らないで外からウイルスを持ち込んでしまわないようにするのだということや、もし、一羽でも鳥インフルエンザになってしまったら、飼育舎の生き物全部を埋めなければならなくなるということをじっくり話しました。それからその子は私と一緒にあって、自分たちがちゃんとしなければ生き物の命がなくなって

しまうことを小さい子にもていねいに教えていました。この出来事を通して、子どもたちの生き物に対する気持ちが「かわいい、大好き」から「自分たちは命を預かっているんだ、自分たちが守るんだ」と、変化していったのです。

そして何より、校長先生を初めとする教職員の協力体制もありがたかったです。このことを通して、学校飼育活動は、その学校の人間関係そのものだと思います。

飼育活動は、心に種をまき、育てていく、そういう生活の一部のような気がしています。たとえ今は目に見えないほど小さくても子どもたちの中にまかれた種は、いつか芽を出し、葉を広げ、花を咲かせるものと信じます。勉強も、運動も、思いやりの温かい心も、全てが「命」なしには成り立ちません。「命」があって、初めて全てがそこから始まるのです。そして、その思いは深まり子どもたちの中で広がっていくことを、私は子どもたちから学びました。その種を絶やさないように、学校生活の一部として、これからも、子どもたちと一緒に楽しく続けていきたいと思います。

最後に、子どもの詩を二つ紹介させてください。

[ふれあいで生まれた笑顔と笑い声]
今日、久しぶりに腕にのせたキャラメル。
何回も抱っこしているハッピー。
チョコとホワイトの 大あばれのおかげで
すてきなものが生まれた。それは
「フフフフ、ワッハッハー。」
の、すばらしい笑い声と笑顔。
みんなの心が一つになった瞬間だ。

[心]
辞書はすごい。
分からないことを、何でも教えてくれる。
辞書はすごい。
勉強もしないで、たくさんを知っている。
辞書はすごい。
でも、ぼくは、
辞書では分からないことも、知っている。
ぼくは今日、
ハッピーやキャラメルたちを抱っこした。
おっかなびっくり さわっていたら
逃げられちゃうけど
「大丈夫」と思って抱っこしたらすぐに抱けた。
やっぱり心はつながっているんだ。
辞書にも分からないこと…発見だ!

(栃木県佐野市立船津川小学校)